

【一】本文について、設問に答えよ。

そのころは覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があったからです。彼はそのために今日まで生きてきたと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かって猛進しないといって、決してその愛のなまぬるいことを証拠だてるわけにはゆきません。いくら熾烈な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちよつと踏みとどまって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去がさし示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。そのうえ彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。私は①この双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

上野から帰った晩は、②私にとつて比較的安静な夜でした。私はKが部屋へ引き上げたあとを追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうして③とりとめもない世間話をわざと彼にしむけました。彼は迷惑そうでした。私の目には勝利の色が多少輝いていたでしょう。私の声にはたしかに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざしたあと、自分の部屋に帰りました。ほかのことにかけては何をしても彼に及ばなかった私も、そのときだけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して持っていたのです。

私はほどなく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で目を覚ましました。見ると、④間の暗が二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の部屋には宵のとおりまだ明かりがついているのです。急に世界の変った私は、少しの間口をきくこともできずに、ぼうつとして、その光景を眺めていました。

そのときKはもう寝たのかとききました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かつて、何か用かときき返しました。Kはたいした用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思つて、便所へ行ったついでにきてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や目つきは、全く私にはわかりませんでした。けれども彼の声は不断よりもかえつて落ち着いていくくらいでした。

Kはやがて開けた暗をぴたりと立て切りました。私の部屋はすぐもとの暗闇に帰りました。私はその暗闇より静かな夢を見るべくまた目を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、昨夕のことを考えてみると、なんだか不思議でした。私はことによると、すべてが夢ではないかと思いましたが。それで飯を食うとき、Kにききました。Kはたしかに暗を開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはつきりした返事もしません。調子の抜けたころになって、ちかごろは熟睡ができるのかとかえつて向こうから私に問うのです。私はなんだか変に感じました。

その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割りになっていたので、二人はやがていっしょにうちを出しました。今朝から昨夕のことが気にかかっている私は、途中でまたKを追究しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はもうやめよう。」と言つたではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kは⑤そういう点にかけて鋭い自尊心を持つた男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると⑥今までまるで気にならなかった⑦その二字が妙な力で私の頭を押さえ始めたのです。